梅鶯仏教壮年

第39号
2006年
10月8日

法輪寺本堂修復

梅鶯仏教壮年会の聞法道場でもあります法輪寺の本堂が、この度修復されることとなりました。

改修内容は左記の通りです。

改修中、皆さまにはご迷惑をお掛け致しますが、宜しくお願いします。

【改修内容】

○本堂屋根覆材の新調
○本堂屋根周囲瓦の葺き替え
○廊下屋根カワラボの葺き替え
○御堂玄関天井張替
○御堂入口サッシ新調
○北・東外壁張替

$$$

法輪寺の歴史（特集）

法輪寺本堂は梅鶯仏壮の会場でもあり、会員の皆さまにも馴染みのある本堂です。この度の改修を機縁として、法輪寺の歴史を2回に渡り連載させて頂きます。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

■あの蓮如上人が「米原市世継」に滞在されていました

「ご文章」を書かれた蓮如上人のことは、皆さまも良くご存じだと思います。

親鸞聖人の子孫で、本願寺の第八代の宗主ですが、当時すたれていた本願寺を再興された方で、私達のお念仏の世界ではとても重要な方ですが、日本の歴史上の人物としても、有名な方です。

その蓮如上人が、実は私達の郷土世継にしばらく滞在されていたことがあるのです。

それは、享徳年間といいますから、西暦でいえば1452年頃です。

蓮如上人は、1457年にお父様の存如上人がご往生なされ、第八代の宗主を継職されました。

それまでは、北陸地方の教化（伝道）の旅や、関東への親鸞聖人のご遺跡を巡拝されていましたから、ちょうどその頃に、やはり教化のために、世継にもお越しになられていたようであります。

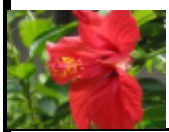
当時の世継村では、さぞかし多くの方が集まって、熱心に蓮如上人のお話しに耳を傾けられたことでありましょう。

■法輪寺のルーツ

その熱心な聴衆の中に、当時の宇賀野村から連日通い続ける長野滋兵衛なる者がおりました。

長野滋兵衛は宇賀野村の豪族であったようですが、ひときわ熱心な聞法者であり、たちまち蓮如上人を深く慕って、篤信の念仏者になられたようであります。

蓮如上人の方でも、この長野滋兵衛の念仏者としてのまことの姿を認めて、「俊慶」という法名を授けられました。



またその後、蓮如上人が長沢の福田寺に立ち寄られた後に、いよいよ旅立たれるとき、この長野滋兵衛が上人との別れを悲しむのを見て、蓮如上人直筆の六字の名号（南無阿弥陀仏）を「形見にせよ」と云ってお渡しになりました。

当時は、現在の様な交通手段が全くない時代ですから、蓮如上人との今生の別れとの思いもあり、長野滋兵衛はさぞかし喜ばれたことであろうと思います。

この六字の名号は、法輪寺に現存しており、内陣のご代前（阿弥陀様の左奥）に、蓮如上人の絵像とともに掛け軸に表装して掛けられています。

是非一度ご拝覧下さい。

その後、法名「俊慶」こと長野滋兵衛は、宇賀野に一軒の坊舎を建立して、お念仏の教化に励み、八十有余歳で往生されたようですが、坊舎はそれ以来長野家が護持することになりました。

この段階では、まだ「法輪寺」という寺号は名付けられていなかったかも知れませんが、この坊舎が法輪寺のルーツであることには間違いありません。

以下次号

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

月のひかり

月のひかりはみつけます、
暗いさみしい裏町を。

いそいでさっと飛び込んで、
そこのまづしいみなし児が、
おどろいて眼をあげたとき、
その眼のなかへもはいります。

ちっとも痛くないやうに、
そして、そこらの破ら屋が、
銀の、御殿にみえるように。

子供はやがてねむつても、
月のひかりは夜あけまで、
しづかにそこに佇つてます。

こはれ荷ぐるま、やぶれ傘、
一本はえた草にまで、
かはらぬ影をやりながら。

金子みすゞ